

第二研究会開催のお知らせ

SFTS研究の現状と課題

岡林 環樹 先生

宮崎大学 産業動物防疫リサーチセンター 副センター長/教授

日時：2026年3月24日（火） 15:00 - 16:30

場所：日本生物科学研究所 管理棟 会議室 2・3（オンライン併用）

【要旨】

重症熱性血小板減少症候（SFTS）は、SFTSウイルス（SFTSV）を原因とするマダニ媒介性の人獣共通感染症である。2011年の中国での報告を契機に、日本・韓国での発生が相次いで明らかとなり、現在では東アジアを中心とした流行が確認されている。ヒトでは急性経過で重症化し、高い致死率を示す。近年はイヌ・ネコを含む動物における発生も多数報告されており、獣医領域での対応は公衆衛生上の重要性を増している。特にネコでは急性かつ重篤な経過を示すことが多く、動物からヒトへの感染事例も報告されていることから、人獣共通感染症としての対策が不可欠である。

SFTSVは三分節ゲノムを有するブニヤウイルス科のウイルスであり、宿主免疫の攪乱、凝固異常、サイトカイン過剰反応など、多様な病態形成機序が関与することが示されている。これらの知見により診断・治療法の研究は進展しているが、現時点でファビピラビル以外に確立した特異的治療薬はなく、早期診断と支持療法が中心である。診断技術として定量RT-PCR、抗体検査、迅速検査法などが普及しつつあるものの、動物医療現場での運用や地域間の検査体制には課題が残る。われわれはこれまで宮崎県内外のネコ・イヌを対象とした検査体制を整

備し、多数の症例解析を通じて、動物におけるSFTSの臨床像とウイルス学的特徴を明らかにしてきた。本講演では、これらの成果を踏まえてSFTSの疫学、病態、診断、治療の現状を整理し、動物領域で明らかになってきた主要課題と、その克服に向けた研究開発の方向性について概説する。また、動物からヒトへの感染リスクが明らかとなった現在、基礎研究だけでなく、獣医医療・ヒト医療・公衆衛生が緊密に連携するワンヘルスの枠組みによる防疫体制構築が不可欠となっている。動物側での発症予防と感染制御は、動物福祉の向上に加えてヒトにおける感染リスク低減にも直結するため、実効性の高い介入手段としてワクチン開発が強く求められている。近年注目されるmRNAワクチン技術は、迅速な設計変更や高い安全性などの利点から、SFTSの予防戦略としても有望と考えられる。

本講演では、これらの背景を踏まえ、SFTS研究の現状と展望を含めてSFTS研究の最新動向を紹介する。ワンヘルス連携に基づく統合的な制御戦略の必要性を強調し、将来的な研究開発の課題について議論したい。



主催

一般財団法人日本生物科学研究所

NIBS

<https://www.nibs.or.jp/>